

— 第51編 — タウンハウスのシェアハウス^{*1}

1666年、当時のロンドン市街地の大半を焼失する大火災が起きた。したがって、今ある建物の大半は、その後建てられたものである。これを契機に、それまでの木組みの建物が禁止され、煉瓦造の建物とすることが定められた。また、建物の階数、高さ、各階の高さなども前面の道路の種類によって規制されることとなる。いわゆる建築基準法のはしりである。

大火後のタウンハウスの建設は、そうしたルールに基づいて進められ、おおむね整然と統一された町並みができていった。そして、18世紀のロンドンでは居住地の階層分離が進み、上・中流階層は皆一斉に、狭苦しく環境の悪い都心を離れ、新たな開発地区やベッドタウンに移動するようになる。こうして、上・中流層はロンドンの西側、ウエストエンド^{*3}に、労働者階級は都心とその東部、イーストエンド^{*4}に、という棲み分けが進んだ。この状況は近年に至



写真51-1 ロンドンの典型的なタウンハウス

^{*1} Townhouse: 大火後に普及した連続建ての住宅形式

^{*2} Share House: 一つの住居を複数人で共有する形式

^{*3} West End: 金融街シテイの西側地区

^{*4} East End: 金融街シテイの東側地区



写真51-2 タウンハウスの中庭

あって、当時整備され戦災を免れたタウンハウスは、今では学生や若い単身世代のシェアハウスの的となって人気がある。時を超えて住まいのパターンは翻訳され直し、時の経済と需要とアイデアに応じてしなやかに変化する。もちろんそこでは悲喜こもごもの愛憎劇が繰り返られる。それを引き受けながら、持続可能な住まいは存在するのである。

るまで受け継がれてきたが、2012年のオリピック開催を機に、イーストエンドがドラスチックに再開発され、その姿を一新することになったのは記憶に新しい。

また、それまでのロンドンでは、店舗や仕事場と住居はすべて一つ屋根の下にあり、商店主も工場主も使用人たちとともに暮らしていた。しかし、この時代から、中流階級の人々は住まいから職場に通勤するようになる。すなわち、現代では当たり前前の、職場と住居の分離という生活様式の変化が進んだのであった。

物価の高いロンドンに



写真51-3 シェアハウスの厨房